

2. 地域防災・減災と大学

講座の概要(1)

- 1 大学連携講座の名称：第1回 「若い力による防災・減災」
- 2 主担当大学及び所属：静岡文化芸術大学
- 3 連携先大学及び所属：浜松医科大学
- 4 開催日時：11月11日（土）14時～16時
- 5 開催場所：静岡文化芸術大学講堂
- 6 参加者数：40人（一般10人、大学生30人）

7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

公開講座のシリーズにおける初回は、災害発生時の学生の力の重要性を改めて考えることで、大学や地域コミュニティの果たすべき役割と分担について再考、整理するような機会となることを目的とした。

2016年熊本大地震を経験したのちに活動している熊本大学のグループの代表として、「D-Seven」から澁谷明佳（しぶやはるか）さんと「Kumarism」から古賀愛深（こがなるみ）さん、そして熊本県立大学で学生ボランティアとしてダイナミックに活動した岩崎貴夏矢（いわさきたかや）さんの3名を迎え、学生の立場で経験したことを紹介していただいた。

また、地元から本学学生防災・減災サークル「さいのこ」代表菊池日向さんと浜松医科大学の防災サークル「ルーチェ」代表菅沼寛明さんからも、現在どのような活動をしていて、課題として感じていることを報告した。その後、パネルディスカッション形式で、甚大災害が発生した際に、「学生・若者としてどのような役割を担うべきか」「どうやって活動をしていくのか」「気をつけること」などの観点から、会場からの質問を交え、意見交換をする時間を設けた。

熊本県立大学の岩崎さんは学生として避難所運営に関わり始めた経緯として、自らがボランティアをするとは考えたことはなかったと淡々と語った。しかし、学生という立場で強みを活かし学生たちが実際に現場でどのように動いた様子が分かり、熊本大学の学生たちとも力を合わせ、ボランティアセンターの運営を担うことになった。この「熊本方式」には会場からも大きな関心が寄せられた。

熊本大学の2サークルの中で、「D-Seven」代表の澁谷さんは防災・減災のことを考えたこともなかったが、自らが南海トラフ地震発生の際の津波被害想定地域である宮崎県出身ということもあり、被災経験から熱い思いをもって地域コミュニティの復興・復興支援の活動を始め取り組むことになった経緯と現在の様子を生き活きと語った。一方、「Kumarism」は地震の影響で観光客が減少している天草地域のツーリズムの復興というユニークな取り組みを展開している。「防災・減災」「復興支援」ということを表面的には感じさせないものであるが、学生の減災への関わり方として、新しい視点を提供してくれるものであった。

地元の「さいのこ」の活動は、代表者の菊池さんから防災・減災というハードなイメージが伴う分野に多くの人々に興味を持ってもらうための工夫として、食やゲームなどを介して楽しみを中心にした取り組みの紹介があった。浜松医科大学の「Luce」について、代表者の菅沼さんから医師や看護師という医療専門職を目指す学生らしい災害医療を学ぶという切り口で防災・減災に関する活動を展開していることが紹介された。

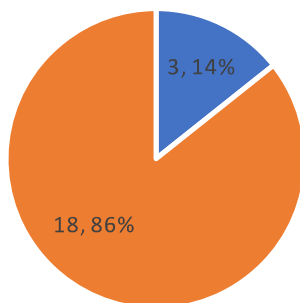
パネルディスカッションでは、熊本からの学生たちに具体的な動きについて内容を深めた。先述したように、特に岩崎さんのボランティアセンターの「熊本方式」運営に関して聴衆から多くに質問が投げられた。

また、学生の強みとして、情報通信機器のリテラシーの高さや存在そのものがあがり、学生同士の活動における悩みや課題として、「防災・減災」活動に関わる学生のネットワークの拡大が共有項目として見えてきた。さらに、学生にとって、学生として関わることの意義、一方で苦労などもテーマとして上がり、ディスカッションで深めることができた。

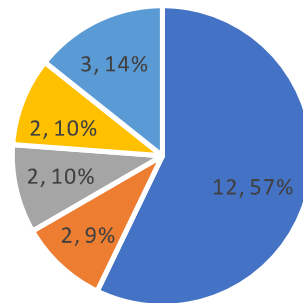
聴衆が少なく、アンケートへの回答者も少なかったが有用性の認識と満足度双方高かった。しかし、内容が良かっただけに、聴衆からはより多くの人に聴いてもらうべき、というようなご意見をいただいた。

以下、簡単な、アンケート結果のまとめを示した。

回答者内訳 1

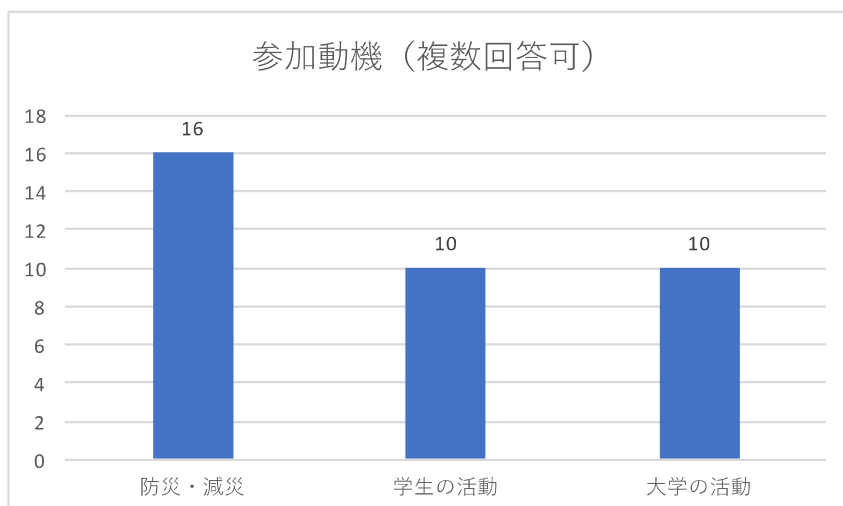


回答者内訳 2

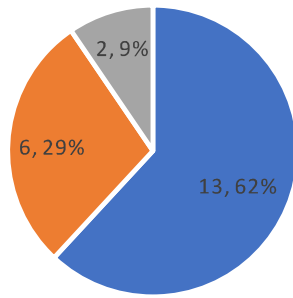


■ 学内 ■ 学外 ■ 大学生 ■ その他学生 ■ 近隣住民 ■ 行政職員 ■ その他

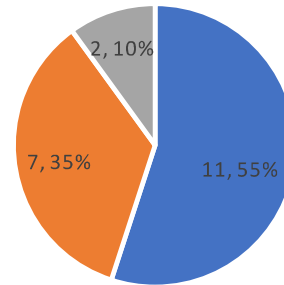
参加動機 (複数回答可)



内容は有用か



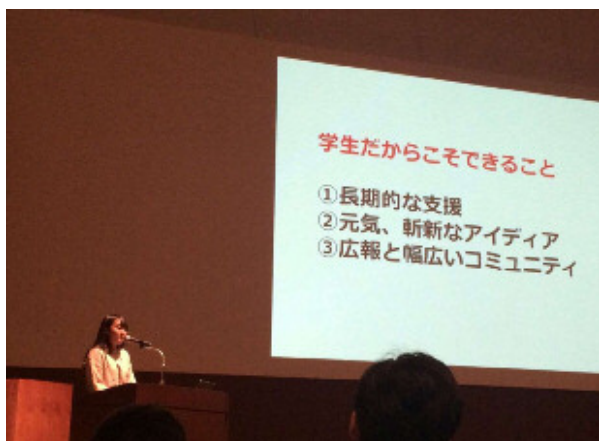
内容に満足したか



■とても有用 ■まあ有用 ■どちらとも言えない ■とても満足 ■まあ満足 ■どちらとも言えない

<感想など>

- VC について実際に話を聞いてよかった。他学部との取り組み、考え、アイデアが新鮮だった。
- 「災害対策」一つについても多角的なアプローチがあり、様々な活動があるのだということを実感しました。自分たちの活動の特殊性を改めて感じました。
- その他学生との連携も防災対策として考えたいです。
- たのもしい学生がたくさんいる。可能性に満ちている（災害時には）。学生の力が頼りになることがよくわかった。
- 医学部生の活動のみを知っていたので、他学部の取り組みも知ることができてとても新鮮でした！もっと知りたいと思いました。
- 学生の活動状況がわかった。貴重な発表を多くの人に聞いて欲しいと思いました。どこも継続の難しさがあること。課題の解決（対応）策につながるとういんですね。いい内容などので、もっとアピールできるとよかったです。他の組織を巻き込むなど。
- 実際に被災したかたの体験やボランティアセンターの様子を知ることができたので、とてもよかった。
- 熊本で実際に活動されている学生の方々とお話をする機会が得られてよかった。
- 熊本で実際に活動している学生の活動、パワーを感じました。素直に楽しかったです。
- 現地ボランティアや活動をしているかたの興味深い話を聞くことができました。
- 興味をもてたこと。私もやってみたいと思った。
- 9月など防災関連イベントとタイアップしてやった方が良い。学生がやっていることをもっと世間にアピールした方が良い（市民団体などとタイアップ）。もっと多くの人に聞いてもらった方が良い。



※講演内容の要旨 (A4 で 2~5 枚)、広報チラシ、当日プログラム等の配布資料、講座写真データ、詳細資料は、別に添付すること。

講座の概要(2)

- 1 大学連携講座の名称：第2回 「震災発生時における大学のレジリエンス」
- 2 主担当大学及び所属：静岡文化芸術大学
- 3 連携先大学及び所属：浜松医科大学、静岡県立大学
- 4 開催日時：12月15日（金）10時～12時
- 5 開催場所：静岡文化芸術大学 中講義室281
- 6 参加者数：42人（一般36人、大学生6人）

7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

第2回は、甚大災害が発生した際に大学としていかに対応するかに焦点を当て内容を構成した。想定したが準備が不十分だった、想定範囲外であった、などの場面の方は必ず起こり得る。「折れる」ことなく回復していく力「レジリエンス」が必要となるが、甚大災害発生時に必要なレジリエンスはどのように高めておく、あるいは発揮することができるのか。大学の組織としてのレジリエンスと今からすること、できることを考える機会となることを意図して以下のような発表者を招いて、活動内容等をご紹介いただき、パネルディスカッションを行った。

- 熊本地震の現場の様子について（熊本県立大学・熊本大学ヒアリングのポイントをご報告）静岡文化芸術大学 財務室 佐々木哲也氏
- 静岡県立大学の防災対策の現状について 静岡県立大学 経営情報学部教授 湯瀬裕昭氏
- 浜松医科大学の防災対策の現状について 浜松医科大学 施設課長 松井宏文氏
- SUACの防災対策の現状について 静岡文化芸術大学 デザイン学部准教授 中野民雄氏

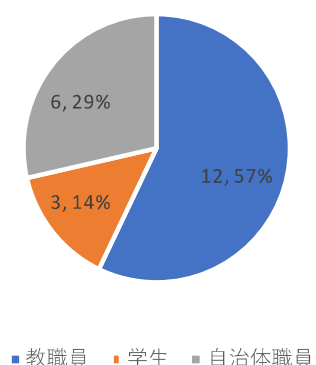
パネルディスカッションは本学文化政策学部の田中啓教授のコーディネートの下で進めた。

各大学のそれぞれに環境や持ち得る資源が異なる中で、どのように考え、取り組んでいるかという具体的な取り組みの状況が共有された。相互に有用な情報交換の場となった。

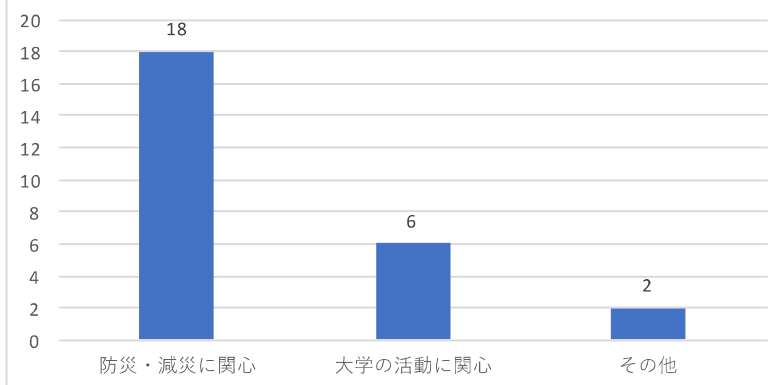
パネルディスカッションでは、大学の地域貢献機能について深めることとなり、教育や研究という役割とのバランス、学生を守る立場など関連する観点から論点を深めることができた。

以下、参加者アンケート（一部のみ回答、N=21）の簡単な結果を示した。なお、行政職員も多くご参加いただき、大学が地域の中で果たす役割に対する期待の声もアンケート内の感想の中で見られた。

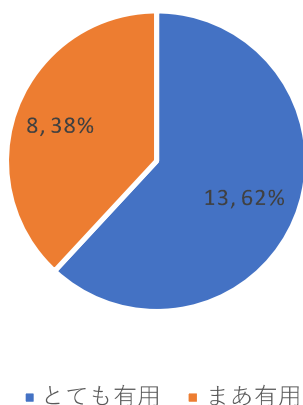
回答者内訳 1



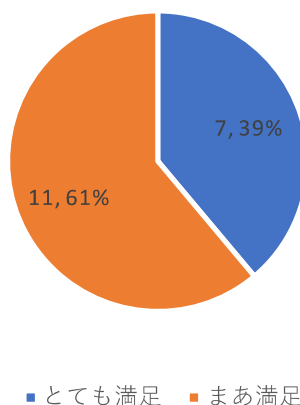
参加動機 (複数回答可)



内容は有用か



内容に満足したか



<感想・ご意見など>

- それぞれの大学の取り組みなどを知ることができてよかった。パネルディスカッションでいろいろな話が聞けて、とても有意義だった。
- デザインの分野と医療分野という普通の防災対策講座にはないお話が聞けてとてもよかったです。
- 一人一人のコミュニケーションの重要性を再確認できた。
- 各大学の防災の取り組み、考え方を学ぶことができた。
- 大学ならではの課題やそれに対する工夫等を知ることができ、面白かった。自治体でまかないきれない部分をどう大学等と機関と連携して協力をお願いしていくかが課題であると感じた。
- 大学の防災への取り組み状況について具体的に知ることができたこと。大学が地域社会に対して、貢献していくことについて、ウェイトが置かれていることがよくわかりました。
- 文芸大の具体的な取り組みが県大や浜医と比べると少ないと感じた。
- 文芸大の非常設備の整備状況を改めて認識することができたため。防災に対して意識が上がったと感じた。
- 県内の他大学の取り組みや意思など、いつも気になっていても知ることができなかったことを深く学ぶことができました。本学にも生かしていくことができることは積極的に取り入れて欲しいと感じました。もちろん、学生中心となって活動していきたいです。
- 第1部は時間が限られているためか、講義者の話しが早口で聞き取りにくかった。と

講座の概要(1)

- 1 大学連携講座の名称：第1回 「若い力による防災・減災」
- 2 主担当大学及び所属：静岡文化芸術大学
- 3 連携先大学及び所属：浜松医科大学
- 4 開催日時：11月11日（土）14時～16時
- 5 開催場所：静岡文化芸術大学講堂
- 6 参加者数：40人（一般10人、大学生30人）

7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

公開講座のシリーズにおける初回は、災害発生時の学生の力の重要性を改めて考えることで、大学や地域コミュニティの果たすべき役割と分担について再考、整理するような機会となることを目的とした。

2016年熊本大地震を経験したのちに活動している熊本大学のグループの代表として、「D-Seven」から澁谷明佳（しぶやはるか）さんと「Kumarism」から古賀愛深（こがなるみ）さん、そして熊本県立大学で学生ボランティアとしてダイナミックに活動した岩崎貴夏矢（いわさきたかや）さんの3名を迎え、学生の立場で経験したことを紹介していただいた。

また、地元から本学学生防災・減災サークル「さいのこ」代表菊池日向さんと浜松医科大学の防災サークル「ルーチェ」代表菅沼寛明さんからも、現在どのような活動をしていて、課題として感じていることを報告した。その後、パネルディスカッション形式で、甚大災害が発生した際に、「学生・若者としてどのような役割を担うべきか」「どうやって活動をしていくのか」「気をつけること」などの観点から、会場からの質問を交え、意見交換をする時間を設けた。

熊本県立大学の岩崎さんは学生として避難所運営に関わり始めた経緯として、自らがボランティアをするとは考えたことはなかったと淡々と語った。しかし、学生という立場で強みを活かし学生たちが実際に現場でどのように動いた様子が分かり、熊本大学の学生たちとも力を合わせ、ボランティアセンターの運営を担うことになった。この「熊本方式」には会場からも大きな関心が寄せられた。

熊本大学の2サークルの中で、「D-Seven」代表の澁谷さんは防災・減災のことを考えたこともなかったが、自らが南海トラフ地震発生の際の津波被害想定地域である宮崎県出身ということもあり、被災経験から熱い思いをもって地域コミュニティの復興・復興支援の活動を始め取り組むことになった経緯と現在の様子を生き活きと語った。一方、「Kumarism」は地震の影響で観光客が減少している天草地域のツーリズムの復興というユニークな取り組みを展開している。「防災・減災」「復興支援」ということを表面的には感じさせないものであるが、学生の減災への関わり方として、新しい視点を提供してくれるものであった。

地元の「さいのこ」の活動は、代表者の菊池さんから防災・減災というハードなイメージが伴う分野に多くの人々に興味を持ってもらうための工夫として、食やゲームなどを介して楽しみを中心にした取り組みの紹介があった。浜松医科大学の「Luce」について、代表者の菅沼さんから医師や看護師という医療専門職を目指す学生らしい災害医療を学ぶという切り口で防災・減災に関する活動を展開していることが紹介された。

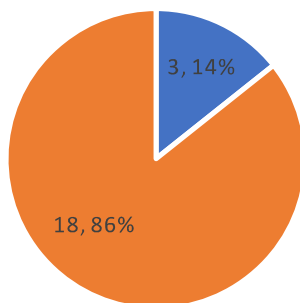
パネルディスカッションでは、熊本からの学生たちに具体的な動きについて内容を深めた。先述したように、特に岩崎さんのボランティアセンターの「熊本方式」運営に関して聴衆から多くに質問が投げられた。

また、学生の強みとして、情報通信機器のリテラシーの高さや存在そのものがあがり、学生同士の活動における悩みや課題として、「防災・減災」活動に関わる学生のネットワークの拡大が共有項目として見えてきた。さらに、学生にとって、学生として関わることの意義、一方で苦労などもテーマとして上がり、ディスカッションで深めることができた。

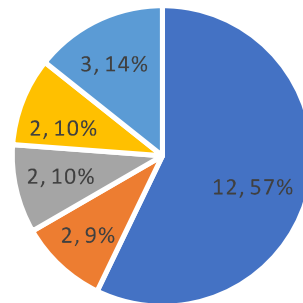
聴衆が少なく、アンケートへの回答者も少なかったが有用性の認識と満足度双方高かった。しかし、内容が良かっただけに、聴衆からはより多くの人に聴いてもらうべき、というようなご意見をいただいた。

以下、簡単な、アンケート結果のまとめを示した。

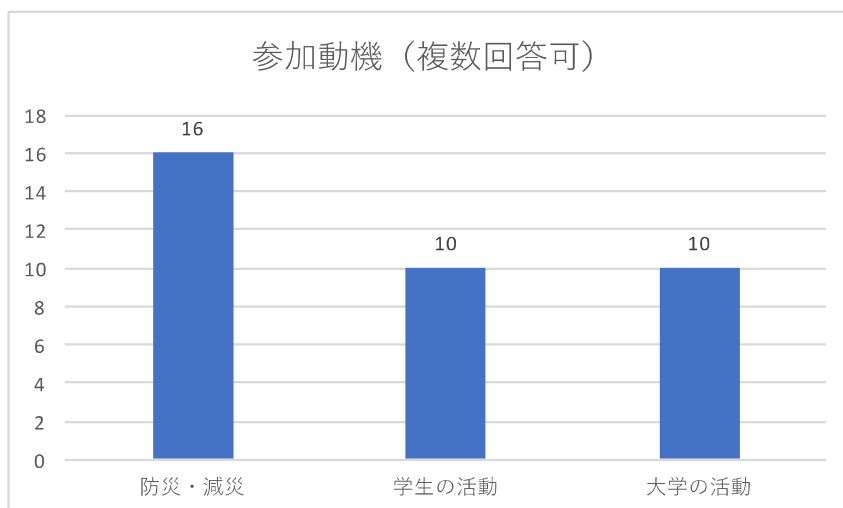
回答者内訳 1



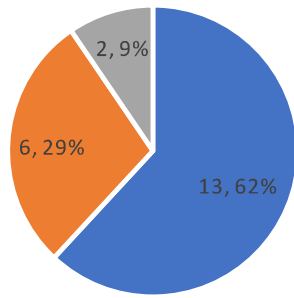
回答者内訳 2



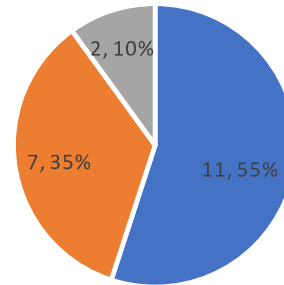
■ 学内 ■ 学外 ■ 大学生 ■ その他学生 ■ 近隣住民 ■ 行政職員 ■ その他



内容は有用か



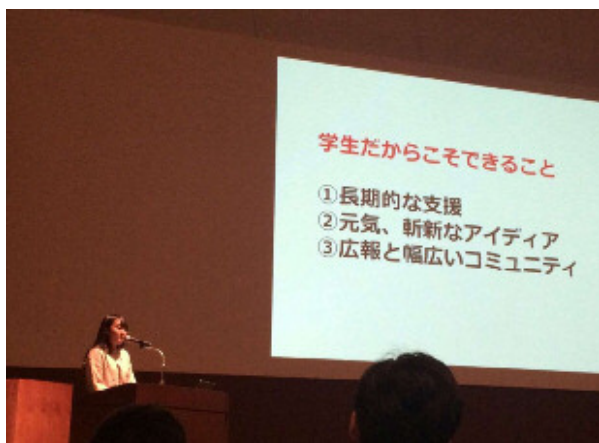
内容に満足したか



■とても有用 ■まあ有用 ■どちらとも言えない ■とても満足 ■まあ満足 ■どちらとも言えない

<感想など>

- VC について実際に話を聞いてよかった。他学部との取り組み、考え、アイデアが新鮮だった。
- 「災害対策」一つについても多角的なアプローチがあり、様々な活動があるのだということを実感しました。自分たちの活動の特殊性を改めて感じました。
- その他学生との連携も防災対策として考えたいです。
- たのもしい学生がたくさんいる。可能性に満ちている（災害時には）。学生の力が頼りになることがよくわかった。
- 医学部生の活動のみを知っていたので、他学部の取り組みも知ることができてとても新鮮でした！もっと知りたいと思いました。
- 学生の活動状況がわかった。貴重な発表を多くの人に聞いて欲しいと思いました。どこも継続の難しさがあること。課題の解決（対応）策につながるとういんですね。いい内容などので、もっとアピールできるとよかったです。他の組織を巻き込むなど。
- 実際に被災したかたの体験やボランティアセンターの様子を知ることができたので、とてもよかった。
- 熊本で実際に活動されている学生の方々とお話をする機会が得られてよかった。
- 熊本で実際に活動している学生の活動、パワーを感じました。素直に楽しかったです。
- 現地ボランティアや活動をしているかたの興味深い話を聞くことができました。
- 興味をもてたこと。私もやってみたいと思った。
- 9月など防災関連イベントとタイアップしてやった方が良い。学生がやっていることをもっと世間にアピールした方が良い（市民団体などとタイアップ）。もっと多くの人に聞いてもらった方が良い。



※講演内容の要旨 (A4 で 2~5 枚)、広報チラシ、当日プログラム等の配布資料、講座写真データ、詳細資料は、別に添付すること。

講座の概要(2)

- 1 大学連携講座の名称：第2回 「震災発生時における大学のレジリエンス」
- 2 主担当大学及び所属：静岡文化芸術大学
- 3 連携先大学及び所属：浜松医科大学、静岡県立大学
- 4 開催日時：12月15日（金）10時～12時
- 5 開催場所：静岡文化芸術大学 中講義室281
- 6 参加者数：42人（一般36人、大学生6人）

7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

第2回は、甚大災害が発生した際に大学としていかに対応するかに焦点を当て内容を構成した。想定したが準備が不十分だった、想定範囲外であった、などの場面の方は必ず起こり得る。「折れる」ことなく回復していく力「レジリエンス」が必要となるが、甚大災害発生時に必要なレジリエンスはどのように高めておく、あるいは発揮することができるのか。大学の組織としてのレジリエンスと今からすること、できることを考える機会となることを意図して以下のような発表者を招いて、活動内容等をご紹介いただき、パネルディスカッションを行った。

- 熊本地震の現場の様子について（熊本県立大学・熊本大学ヒアリングのポイントをご報告）静岡文化芸術大学 財務室 佐々木哲也氏
- 静岡県立大学の防災対策の現状について 静岡県立大学 経営情報学部教授 湯瀬裕昭氏
- 浜松医科大学の防災対策の現状について 浜松医科大学 施設課長 松井宏文氏
- SUACの防災対策の現状について 静岡文化芸術大学 デザイン学部准教授 中野民雄氏

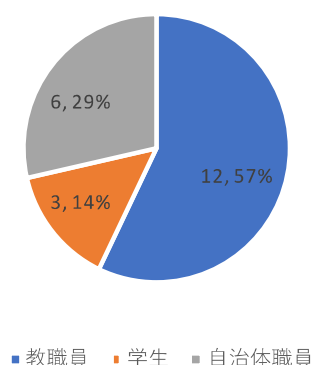
パネルディスカッションは本学文化政策学部の田中啓教授のコーディネートの下で進めた。

各大学のそれぞれに環境や持ち得る資源が異なる中で、どのように考え、取り組んでいるかという具体的な取り組みの状況が共有された。相互に有用な情報交換の場となった。

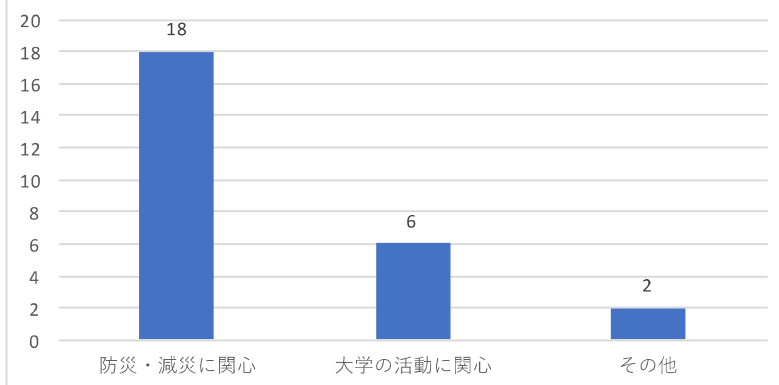
パネルディスカッションでは、大学の地域貢献機能について深めることとなり、教育や研究という役割とのバランス、学生を守る立場など関連する観点から論点を深めることができた。

以下、参加者アンケート（一部のみ回答、N=21）の簡単な結果を示した。なお、行政職員も多くご参加いただき、大学が地域の中で果たす役割に対する期待の声もアンケート内の感想の中で見られた。

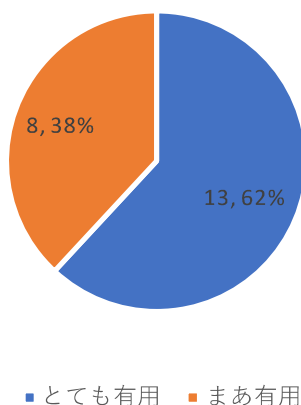
回答者内訳 1



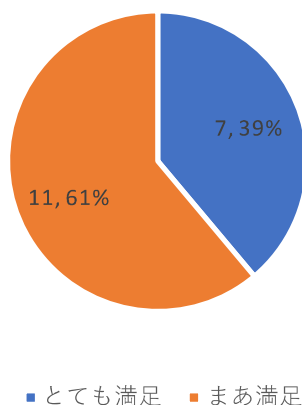
参加動機 (複数回答可)



内容は有用か



内容に満足したか



<感想・ご意見など>

- それぞれの大学の取り組みなどを知ることができてよかった。パネルディスカッションでいろいろな話が聞けて、とても有意義だった。
- デザインの分野と医療分野という普通の防災対策講座にはないお話が聞けてとてもよかったです。
- 一人一人のコミュニケーションの重要性を再確認できた。
- 各大学の防災の取り組み、考え方を学ぶことができた。
- 大学ならではの課題やそれに対する工夫等を知ることができ、面白かった。自治体でまかないきれない部分をどう大学等と機関と連携して協力をお願いしていくかが課題であると感じた。
- 大学の防災への取り組み状況について具体的に知ることができたこと。大学が地域社会に対して、貢献していくことについて、ウェイトが置かれていることがよくわかりました。
- 文芸大の具体的な取り組みが県大や浜医と比べると少ないと感じた。
- 文芸大の非常設備の整備状況を改めて認識することができたため。防災に対して意識が上がったと感じた。
- 県内の他大学の取り組みや意思など、いつも気になっていても知ることができなかったことを深く学ぶことができました。本学にも生かしていくことができることは積極的に取り入れて欲しいと感じました。もちろん、学生中心となって活動していきたいです。
- 第1部は時間が限られているためか、講義者の話しが早口で聞き取りにくかった。と

ても有意義な講座と思われるので、もう少し余裕を持って時間配分して欲しかった。

- 防災については、全教職員、学生に周知、理解が必要なため、全体が受講できる体制側の考えた方が良いと思う。
- 近辺大学とのつながりを感じることができた。

ても有意義な講座と思われるので、もう少し余裕を持って時間配分して欲しかった。

- 防災については、全教職員、学生に周知、理解が必要なため、全体が受講できる体制側の考えた方が良く思う。
- 近辺大学とのつながりを感じることができた。



講座の概要(3)

- 1 大学連携講座の名称：
第3回「知っておこう、やってみよう！避難所運営のイロハ」
- 2 主担当大学及び所属：静岡文化芸術大学
- 3 連携先大学及び所属：浜松医科大学
- 4 開催日時：1月12日（金）9時～12時
- 5 開催場所：静岡文化芸術大学 自由創造工房
- 6 参加者数：59人（一般47人、大学生12人）

7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

第3回は、現実的、実践的な知識とスキルを大学を含む地域コミュニティのメンバーで共に学ぶことを目的として内容を構成した。具体的には、期間の長短はあるであろうが、避難所として施設を開いたり、運営をする側になる可能性のある大学と地域コミュニティメンバーを対象に、避難所の開設と運営に関する注意点について知り、実際に経験してみるHUGゲームを利用したワークショップを行った。

以下のようなスケジュールで進行した。

<第一部>

情報提供：「避難所になるかもしれない大学」

静岡文化芸術大学 財務室 佐々木哲也氏

講演：「知っておきたい避難所設営と運営のイロハ」

講師：浜松医科大学健康社会医学講座 尾島俊之教授

<第二部>やってみよう！

講演：「HUG」とは？

講師：浜松医科大学健康社会医学講座 岡田栄作助教

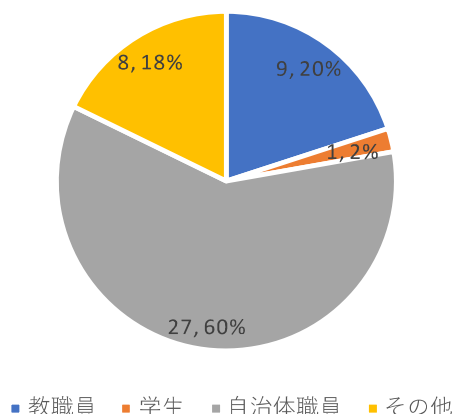
（ウォームアップ by さいのこメンバー）

HUGゲームワークショップ（実施、振り返りなどを含め）

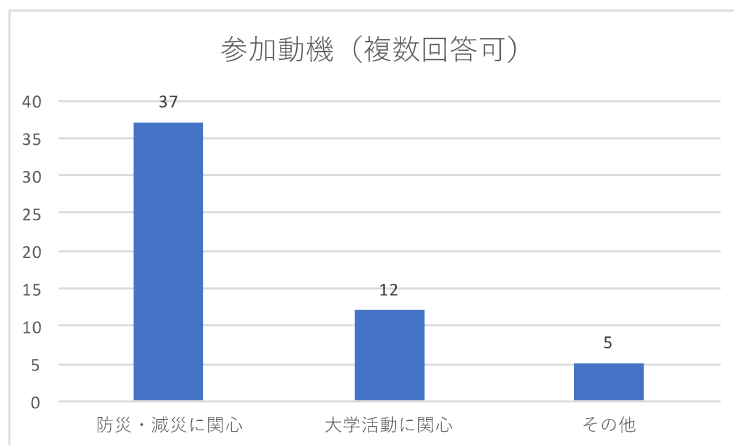
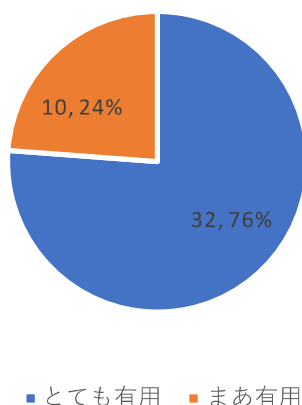
参加者には浜松市を中心とした行政職員が多かった。近隣住民の参加もあり、学生も加わり多様な構成でゲームに取り組むことができた。参加者の有用性の認識と満足度は高かったと言える。今後もこのような場の設定を求める要望が多く寄せられ、継続的な取り組みの必要性を実感した。

以下、参加者アンケート集計結果を示す。

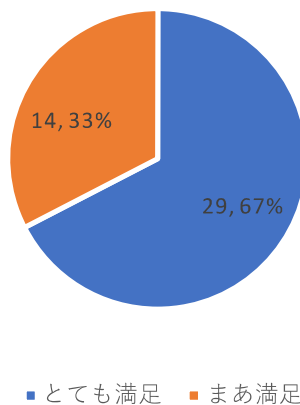
回答者内訳 1



内容は有用か



内容に満足したか



<ご意見・感想など>

- HUGをやってみて自分で用意しておいたほうがいい防災用品が実感を持ってわかった。トイレが一番心配。
- HUGをやれる機会が案外ない。
- HUGを初めて体験できてよかった。トイレの場所を決めるのに苦労した。
- HUGグループでいろいろと話しあいができたのがよかったと思う。
- HUG訓練のやり方が参考になった
- ある程度経験のある人とHUGができて情報が収穫できた。
- いつ起こるかかわからない災害を身近に考える良い機会になりました。
- 事前に考えることがいかに重要かがよく理解できました
- 堅苦しくなく、聴きやすい内容だった
- 実際、被災地に行った方の現場の声が聞いて今後の業務に非常に参考になりました。特に栄養士さんのお話のところが印象に残っています。
- 実際にHUGでシチュエーションごとに考えて初めて気づいたことが多かった
- 実際にシーンを想定して運営を考えるHUGゲームがためになった。いろいろと考えがおよんでいないことがわかった。
- 尾島先生の講義にヒントをいただいた
- 想定していなかったことがいくつかあり、備えていく上でのヒントとなった。
- 時間にもう少し余裕がほしかった。せっかくの講師の先生のお話が駆け足でした。
- 様々な立場の人でHUGをおこない、それぞれの立場で感じることを、思うことを発言で

きているため、とても有意義な時間だと思えます。

- 災害支援ナースとして、保健師と協働し避難所運営を担うことになる。様々な地域のニーズを知ることができた。
- 行政だけで防災を考えるのではなく、様々な方々の考え方を取り入れることが大切だと感じた。
- 行政の立場にとして、避難所運営につきっきりになれないと考えられるため、自助、共助の力を充実させることが重要である旨の内容であった。
- 被災地での避難所の運営支援を行政と一緒にやっていますが、「体重計」や「ドアノブの消毒」など新たな発見がありました、HUGでも新たな課題が見つかりました。
- 身近なテーマに対して知識を深めることができた。
- 避難所の実態、時系列での対応状況がよく理解できた。
- 避難所運営の手法などについて、周知することが非常に課題だと感じており、このような機会は避難所運営の周知について実践的な点を含めてできることから、非常に有意義であると思えます。
- 防災について普段、強く意識する機会が少ないので、良い経験になりました。

<今後の活動への要望>

- HUGを学ぶことができてよかった。浜松を想定した防災訓練（机上）を知りたい。
- まだまだ知らないことが多いので、講座や大学でも学びたいと思えます。学習の機会の情報を教えてほしいです。
- 大学における学生の関わり方（災害時）
- 災害が起きる前から災害発生後までの災害ボランティアの役割について知りたいです。
- 職場や学校や地域単位で簡単でも頻度の高い訓練を。HUGゲームは大変役に立つと思った。
- 自主防災隊（地域住民）の取り組み事例などの紹介
- 避難所運営については、内容が多岐にわたるため、知っておくと良い知識等が多い。健康管理、食料の準備等、一つ一つの分野にも特化した講義があれば良いと思う。
- 避難所生活な過酷な状況になる。そもそも避難所に来なくても良い事前にできる準備についての話ができれば良いと思う。
- 防災、減災に関しては何度行っても無駄にはならないと思うので、できる限りこのような機会をつくってほしい
- 防災について一般の方で関心がない人、自分ごとと捉えない人が多くいます。今回のような機会はこれを解消するきっかけになることと思えます。企画するのは大変ですが、今後もこのような機会が増えることを期待しています。

